

自他を大切にできる子どもの育成 命の学習の取組

加古川市立鳩里小学校
主幹教諭 塩濱千晴

はじめに

本校では、子どもたちの発達段階に応じたプログラムのもと、家庭と連携した学習や体験活動を通して命の学習に取り組んでいる。

命の学習を通して一人一人が命の大切さを実感し、自分だけでなく、まわりの友だちの命も同じように大切であることを学んでいる。「あなたのことが大切だよ。」というメッセージを伝えることによって、自己肯定感を高め、一人の人間として自分らしく成長してほしいと願っている。

1 取組の内容・方法

(1) 1年生の取組

男女の性器に違いがあることを知らせ、命の誕生と深い関わりがあることに気づかせるとともに、体を大切にできる態度を身につけさせる。また、服の色の違いで男女の違いが分かるわけではないことに気づかせる。

ウイルスやばい菌から身を守るためには、手を洗ったりお風呂に入ったりして、体を清潔にすることが大切であることを学ばせる。

プライベートゾーンについて知らせ、危険から身を守ることを学ばせる。

(2) 2年生の取組

赤ちゃんは、お母さんの子宮の中での育ち、生まれてほしいという赤ちゃんの強い気持ちとお母さんの産む力と周りの人の協力によって生まれてくることを学ばせる。

DVD「生まれるよ」をみて誕生の喜びを感じさせ、命を大切にできる気持ちを持たせる。

(3) 3年生の取組

男の人がもつ命のもと(精子)と女の人がもつ命のもと(卵子)がくっついて命が作られることを学ばせる。

卵子と精子がどうやって結びついたのかを知らせ、自分の命は、3億の精子のうちたまたま1個が卵子に入ったからできたものであり、偶然による奇跡的なことを知らせる。

絵本「さっちゃんのまほうのて」を使って、障がいをもっていても生まれてほしいという強い気持ちで生まれてきたことを知らせ、生まれてきたすべての命が大切であることを実感させる。

助産師さん、妊婦さんを招いて、命について考えさせる。

○妊婦さんの話を聞く

事前に子どもたちに妊婦さんに聞いてみたいことをアンケート調査しておき、それをもとに養護教諭が妊婦さんに「赤ちゃんができたとき、どんな気持ちでしたか?」「食べ物で気を付けていることはありますか?」などと質問する。

妊婦さんが「赤ちゃんができたとわかった時は、涙が出るほど嬉しかった。」「苦手だった魚も赤ちゃんに栄養を送るために食べている。」などと話し、おなかの中の赤ちゃんを大切に育て、赤ちゃんが生まれるのをとても楽しみにしていることを子どもたちに知らせる。

○胎児の心音を聞く

助産師さんが実物大の赤ちゃん人形を使っておなかの中の赤ちゃんの位置を示し、ドップラーを使って妊婦さんのおなかの中の赤ちゃんの心臓の音を聞かせ、子どもたちに、赤ちゃんが活着ていることを感じさせる。1分間の赤ちゃんの心音の回数と、代表児童の心音の回数を数えさせ、赤ちゃんの心音のほうが早いことに気づかせる。

○妊婦さんのおなかを触る

助産師さんからおなかの触り方について説明を聞いた後、一人ずつ子どもたち全員が妊婦さんのおなかを触らせてもらうことで、命の重さを感じさせる。令和2年度はコロナ感染予防のため、妊婦さんのおなかを触る児童は各クラス1名にした。



○助産師さんの話を聞く

助産師さんに、赤ちゃん人形を使って、おなかの中の赤ちゃんが育っていく様子やお母さんの体の変化の話をしてもらう。出産の様子についても模型を使って話をしてもらう。スライドでおなかの中の赤ちゃんの成長の姿を確認し、最後は、周りの人たちが見守る中、生まれてくる赤ちゃんとお母さんが力を合わせて、出産する様子を見せる。

「赤ちゃん先生プロジェクト加古川」の赤ちゃんとお母さんを招き、実際に赤ちゃんとお触れ合い、赤ちゃんが生まれた時の話などを聞くことによって、親の思いや自分や友達の命の大切さに気づかせる。

○1回目「自分はどれだけ大きくなったかな」

- ・赤ちゃんとお自分の手足の大きさを比べさせる。
- ・お母さんから赤ちゃんとの生活の様子について聞くことによって、自分も今まで大切に育てられてここまで大きくなったことを知らせ、自分が生まれてきたことの喜びの気持ちを持たせる。

○2回目「命の奇跡」

- ・両親や、家族、お世話になった人がいるからこそ自分ではあるが、自分自身が生まれたいという強い力がなかったらこの世にはいないことを知らせ、生まれたかったのに生まれてこられなかった命もあることを知らせる。
- ・赤ちゃんのお母さんから、妊娠時期、出産の時の話を聞き、赤ちゃんのお母さんから妊娠中のエコー写真や、新生児の時のグッズを見せてもらう。

○3回目「言葉の力」

- ・ふわふわ言葉、ちくちく言葉について知らせ、言葉には力があり、相手に発す

る言葉の力は自分の力になることを知らせる。

- ・言葉を話せない赤ちゃんが何を求めているのかを考えさせ、赤ちゃんにはどんな言葉をかけたらよいのか考えさせる。

○4回目「みんなちがってみんないい」

- ・今の自分でよいということに気づかせ、個性があつていいことを理解させる。
- ・お母さんから赤ちゃんの成長についての悩みをきいて、どうしたらよいかグループで話し合わせる。

○5回目「みんなの未来」

- ・今までの学習を振り返り、一人一人に大切な命があることを感じさせる。
- ・赤ちゃん先生の未来、自分の未来を考えて、赤ちゃん先生へ書いた手紙を読んで渡し、「おそすぎないうちに」を歌わせる。

< 3年生 児童の感想より >

- ・ぼくが今ここにいるのは、お父さんの精子とお母さんの卵子がくっついて、りゅうごんをせず生まれてくることができたからだということがわかりました。ぼくは今、すごくうれしいです。
- ・これから、つらいことや悲しいことがあるかもしれないけど、楽しいことやうれしいこともあるから、命をむだにしないように生きていきたいと思います。

< 3年生 保護者の感想より >

- ・「生まれてくるってことは奇跡に近いんだね。」と娘が言いました。今回の学習をよく理解できたと思います。自分の命、他人の命も大切に、また生まれてくる命に対しても考えて行動できる人になってほしいと思いました。
- ・命の学習で今まで知らなかったことをたくさん知ることができたようです。特に自分がおなかの中にいた時のことや生まれてくるまでのことなどを家で話してくれました。久しぶりに母子手帳を見ながらおなかの中にいた時のことや生まれた時のことを思い出しました。そしてこんなに大きく成長したことをあらためて嬉しく思いました。

(4) 4年生の取組

思春期の体の変化や月経、射精の仕組みについて知らせ、健康に成長していることを意識させる。

「NPOエフフィールド」の講師を招いて、DVD「10歳のきみへ」を使って日野原重明先生からのメッセージを伝え、聴診器で自分の心臓の音を聞かせることによって、命の重みを感じさせる。

(5) 5年生の取組

命の誕生の仕組みについて理解し、生命を尊重する気持ちを持たせる。

ダウン症候群の子どものお母さんを招いて、障がいのある子も生まれてほしいという強い気



平成31年度



令和2年度はリモートで実施

持ちで生まれてきたことを知らせ、障がいのある人に無関心でなく、共に生きていくことを考えさせる。

(6) 6年生の取組

兵庫県臓器移植コーディネーターを招いて、臓器移植でしか助からない命があることを知らせ、命について考えさせる。

多様な性について理解させ、男だから女だからではなく、個性を尊重する態度を身につけさせる。

6年間の命の学習を振り返り、思春期の子どもたちがこれから自分らしく生きていくための大切なメッセージをおくる。

< 6年生 児童の感想 >

- ・ぼくは、当たり前のように生きているけど、生きたくても生きられない人もいるので、生きていることに感謝してこのひとつの大切な命を大事にしたいです。
- ・私は、楽になりたい、死にたいと思ったことがあるけど、生きたいと思っているのに死んでしまうことはとても悲しいことなので、毎日一生けん命生きたいと思いました。
- ・私は、自分が男の子になりたいと思ったことがあってそれは気持ちが悪いかなと思っていただけ、自分だけではないことを聞いてほっとしました。
- ・今日の学習をして、私は私でいいんだと思えて泣きそうになるほどうれしくなりました。

3 取組の成果

各学年の担任と命の学習の前に研修を行い、養護教諭が核となって担任と共に命の学習を進めたことで、養護教諭の専門性を生かすことができた。命の大切さは実感しにくいものであるが、3年生では、胎児の心臓の音をきいたり妊婦さんのおなかに触れたりすることによって、子どもたちはそこに命があることを体感することができた。さらに妊婦さんの気持ちや助産師さんの話を聞いたり、赤ちゃんに触れ合ったりすることによって自分の時はどうだったか考え、自分の命と向き合って自己肯定感を高めることができた。

また、各学年の保護者に、授業の前と授業の後に保健だよりを配布することで、保護者の命の学習に対する理解を得ることができた。

4 課題及び今後の取組の方向

近年の社会情勢の変化と共に、子どもたちを取り巻く家庭のあり方も多様化している。6年生でセクシャルマイノリティーについて取り上げ、自分とは違う人という認識ではなく、自分たちも多様な性の一部であるという認識を持つように指導したが、教師がまず、正しい知識を持つことが必要である。そして家庭と連携して共に子どもたちが自己肯定感をもって生きていくことができるように支援をしていきたい。

子どもたちが、自分は価値のある人間であると思い、自分のことを好きになって生きていくことができるように願って、今後も命の学習の実践を続けていきたい。